

江戸時代までのカレンダーは、月の満ち欠けを基準に作っていました。このカレンダーを難しい言葉で「太陰太陽暦」（太陰Ⅱ月のこと）、簡単にすると「旧暦」と呼んでいます。今のカレンダーは、明治時代から使われるようになりました。太陽の動きを基準にしている、難しい言い方で「グレゴリオ暦」、簡単にすると「新暦」と呼ばれています。

とても複雑な話なので、ざっくりと、簡単にお話しします。「中秋の名月」とは、旧暦の八月十五日の夜に見える月を指すことを知っていましたか？だから十五日の夜の月↓十五夜と呼ばれているのです。月の満ち欠けを基準にしていた旧暦と、太陽の動きを基準にしている現在の新暦とでは、約一か月のズレが出ます。そのため、旧暦の八月十五日というと、実際に今年の場合、九月二十一日でした。二十一日なのに十五夜と言うのはこのズレのせいなのです。教室の月の満ち欠けが載っているカレンダーに小さく書いてある数字が、「旧暦」の日付を表しています。

今年の中秋の名月「十五夜」の日、ススキを飾ったり、お団子を飾ったりしたお家があったのではないのでしょうか。今年の十五夜は満月でしたが、十五夜の日は必ず満月になる訳ではありません。十五夜と満月が同日になったのは、八年ぶりのことです。来年、再来年も十五夜と満月が同日になりますが、再来

年の次に十五夜と満月が同日になるのは二〇三〇年と、ずっと先のことになります。

十五夜の行事は中国から伝わったと言われていて、現在でも中国では「中秋節」と呼ぶ祝日として、重要な行事になっています。

中国ではお団子ではなくて、「月餅」というお菓子を供えます。その昔、中国が元（げん）と呼ばれていたころ、ある人が月餅の中に秘密書類を入れて配り、怪しまれずにたくさんの人を集めて、元を倒し、明（みん）という国を建てたというような伝説が残っています。

十五夜の行事について調べていた時、『江戸の庶民生活・行事事典』渡辺信一郎著 東京堂出版 という本に、江戸の人たちは十五夜の晩に、ススキや団子を供える以外に、「蛤」も供えてから食べていたということが書かれています。「蛤は月見と聞いて死ぬ覚悟」という川柳も残されていて、十五夜に食べられる運命にある蛤の気持ちも伝わってくるようです。

ひな祭りの日や結婚式の日には、蛤の吸い物を食べるといふ話は知っていましたが、十五夜の日にも蛤を食べていたということを、恥ずかしながら、初めて知りました。

蛤は貝殻がぴたりと合い、ほかの貝と合わせる事ができないことから、結婚式の日に出される縁起の良い食べ物とされています。

ちなみに、ハマグリ^ハびたりと合う^ハその反対^ハグリハマ^ハびたりと合わない^ハグレハ^ハマ^ハグレル、ということ、^ハ「グレル」^ハ横道にそれる。よくない人になるといふ言葉の語源が、「蛤」だと言われています。オツといけない。話がグレてしまいました。

今日十月十八日は、旧暦の九月十三日。「十三夜」と呼び、日本ではお月見をする習慣があります。十五夜は里芋の収穫期にあたるため、別名「芋名月」と呼ばれています。関東の月見団子は真ん丸ですが、関西の月見団子は、里芋型で頭がとがっていて、きな粉がついているものもあるようです。

十三夜は別名「豆名月」や「栗名月」、「後（のち）の月」と呼ばれています。ススキや団子、枝豆や栗を供えて月見をします。十五夜の団子は十五個。十三夜の団子は十三個と言われています。

昔は、十五夜と十三夜、両方をセットで祝って初めて、お月見の完了としたようです。十三夜は満月の一歩手前でまん丸ではありませんが、澄んだ秋の空気の中、今晚、お月さんが見えるようでしたら、虫の音を聞きながら、眺めてみるといいかもしれません。

あつ、くれぐれも、月に向かってほえたり、グレたり!?! しませんように。

